

著者 フミン
イラスト みぞね

惚れ話

18禁



惚れ話

「あなたのお陰で助かりました。本当に困っていたのです」

「とんでも御座いません。この程度を恩とは言いませんわ」

男は食事をしながら礼を言った。彼の視線の先には、絵に描いた様な美しい女性が微笑んでいた。

人里から離れた山奥に一件の家が建っている。屋根はかやぶきで出来ており壁は土壁でほどよく立派な、一般的な農家の人が住む一件の家に彼はいた。

男は旅人だった。歳は二十を過ぎた辺りで妻はまだ居ない。古ぼけた和服を身に着けている。

彼は決してのんきな理由で旅をしている訳ではなかった。

男は高貴な家の生まれではなかった。農家に産まれ、幼い頃から毎日農作業をして過ごしていた。

兄弟はおらず、母は病気で死に、父の方は若くなかったからか、数年前に突然急死した。それと同時運悪く農家の仕事は不作が続いた。周囲の人間関係も上手くいかず、収入となる作物も得られない。地主には怒られてばかりで、そんな貧しい場所に嫁が来る筈もない。苦渋の選択だった。

衣類と僅かな食料を持参して、逃げる様に生まれ育った土地を後にした。

数十日、偶然辿り着いたのがこの一軒家だった。

そこに住んでいたのは、一人の女性だった。銀髪の長髪で肌は触れるのも勿体無い程の色白、大和撫子とはまさにこのことだった。初対面の男に対し彼女は全く警戒心を見せずに家へ迎え入れると、女は男に風呂を貸し、食事を振舞った。

この広い家に住んでいたのは彼女一人だけで、周囲にも人間が住んでいる様子もない。男は女だけで珍しいなと疑問を抱きながらも、彼女の好意に甘えることにした。

「しかし立派な家ですね。あなたの他に家族は住んでいるのですか？」

「いいえ、家族は遠く離れた所に住んでいます。この辺りに人は住んでいませんし、人を見たのは久しぶりです。暫く誰とも話していなかったののでつい声をかけてしまいました」

「迷惑だなんて思っていないですよ。当てもなく旅をしているだけなので」

「男さんは、身寄りはいないのですか？」

男は、酒に口をつけながら返す。

「はい。とうに両親も無くしています。一人虚しく旅を続けていた途中でした」

彼は、いつかは食料がきちんと確保出来る場所に移住したいと考えながら旅をしていた。だが目ぼしい土地もなく、一人では広大な土地を開拓することは不可能に近い。旅の途中村に立ち寄るこ

ともあつたが、余所者を受け入れる様な集落には巡り合えなかつた。

「そうなのですか。さそがし苦勞されてきたのでしよう、良かったら今夜だけでもお泊りになって
いってください」

「いえ、そこまで迷惑をかける訳には」

「遠慮なさらず。さつきも言った通り、この山の周辺には深い森しかありません。暗い夜道で間違
つて谷底にでも落ちてしまつたら大変です。急ぐ旅路ではないのでしよう？」

「――では、お言葉に甘えて」

首を縦に振ると女性は笑つた。

静かに返事をした男だったが、内心とても嬉しがつていた。屋根がある場所で寝られるだけでも
有りがたいのに、こんな美人に親切にして貰えるのだから。

彼女が賊ではないかと疑つたが、考えてみれば盗まれる様な貴重な物もつていないし、身代金
を要求する相手もない。なんの得もないのだ。だからこそ、この女性の好意に甘えることにした。

明日になったら掃除でも雑用でもして僅かでも恩返しをしよう。彼はそう決心した。

先ず感じたのは、自分の体にのしかかる重みだつた。

男は女性に借りた敷布団で睡眠をとっていた。暑さと寝苦しさに安眠を邪魔され目を開けると、視界には有り得ない光景が映っていた。

女が男に跨っていた。

彼の腰部部分に体重をかけて、手の平で男の腕を固定して身動きが取れないようにしている。そして、彼の丁度目線に、彼女の豊富な乳房があった。

彼女は布を一切身につけていなかった。

月明かりが差し込む中、男は女を凝視していた。まるで苦行など一切行つてこなかったかのような美しい裸体。形の美しい円形の胸部。引き締まった腰。薄い陰毛が生えた陰部。

不思議と性的興奮はない。ただただ、男は彼女の姿に見とれていた。

「人間に会うのは久しぶりだ。人間には、な」

現在の姿に恥じることもなく女性は言う。

「良い人間を見つけた。若いし健康そうな男だ。聞くところ、お前を心配する家族もいないみたいだし、安心して食事が出る」

ただ口を開いて呆然としている男を尻目に、女性は変化し始めた。

整った顔についている鼻が伸び始める。重なっていた手は縮みだし指が毛深くなっていく。手だ

けではない。指先、胸元、太ももと、突然全身から隙間なく毛が生えてきた。時々骨が折れるような鈍い音が響き女は苦悶の表情を浮かべていたが、それでも突然の変異は止まることはない。体に移していた目線をもう一度女の顔に戻すと、彼女は既に人間の顔ではなくなっていた。

全身は灰色の様な体毛で覆われている。細い顔に独特の細目、まるで獲物を品定めしているかの様な瞳。いや、実際にそうしているのだった。変化した彼女の姿は、人間と獣を混ぜたような姿。

男に跨る彼女は、明らかに人間ではなかった。

「妖狐(狐の妖怪)か？」

「そうだ、私は銀狐。暗いから分かりづらいだろうが、銀色の毛並みをしているだろう？」

確かに、男にはよく見えなかった。

「こんな山奥に入ったのが運の尽きだったな。今日は満月で最高に気分が良い。そして目の前には悠長に寝転ぶ新鮮な餌。満足出来る夜になりそうだ」

妖狐は舌を出して、不敵な笑みを見せてくる。

「化けていたのか。ではこの家や先程の食事は全てまやかしか？」

「安心しろ。この家と粗食は私が用意した本物だ。この家には、昔人間が住んでいたのだよ。食べ物人間を真似て作ってみた。米は殆ど_二がしてしまったがね。最後の食事は美味しかったかい？」

けけけ と、人間からかけ離れた甲高い声を上げる。

妖狐が目的としていたのは金でも物でもない、彼の命だった。男よりも若干大きなその体で、男をしつかりと固定して離さない。

「さて、無駄話をして死期を遅らせても仕方ない。祈る間はやらないぞ」

狐は自分の口を大きく開けて男の顔に近づけていく。生臭い獣の吐息が男の鼻につく。

だが彼は、そんな状況に追い込まれても、一向に抵抗する気配を見せない。

あまりに冷静なその態度に、彼女は思わず眉を寄せた。

「お前、恐くないようだな？」

その言葉にも男は反応しない。

おかしい。銀狐はそう思う。いくら旅人で生まれがこの地域ではないとはいえ、妖怪の類の知識を持たない青年がいるだろうか。普通、先祖代々そのような知識は子孫へと受け継がれる筈だし、男は良い年齢なのだから知識不足などということは有り得ないだろう。詳しく知らないにしても、狐や狸が人を化かすというのは広く知れ渡っていると聞く。現にこいつは狐については認知しているみたいだから、全く慌てないのはいくらなんでもおかしい。

未だに食い入る様に視線を送る男に、違和感を持った時だった。

唐突に、男は妖狐に接吻をした。

銀狐の方は、この現状を理解するのに数十秒を費やした。自分の大きな口に、人間の唇が重なっているのだ。

少しして、押さえつけていた男から身をひるがえす銀狐。

「はっ？ え？」

未知の体験をした彼女は言葉を無くす。

「なんだ。妖狐の姿の方が、人間よりも美しいじゃないか」

漸く喋った男から漏れたのは、狐にとっては更に衝撃的な発言だった。彼は体を起こし膝立ちして、飛び上がった銀狐にのしかかっていく。

妖怪である彼女にとって非力な人間を退かすのは容易いことだったが、頭が混乱していたからか、なすがまま、少し古びた布団の上に仰向けにされてしまった。

「人間に化けているよりも、あなたのその姿の方が好みだ」

その言葉は、事実上狐にとって生まれて初めて受けた異性からの告白だった。しかも相手がこれから頂くつもり、人間の若者である。

彼女は困ってしまった。というのも、その表情と声からは、一切偽りの様子が見えないのだ。人

間というのは単純で、嘘をつけば微量な戸惑いを見せる。人間よりも長く生きてきた銀狐からすればそんなものを見分けるのは簡単だった。しかし、この男は恐怖を隠す為の隠蔽ではなく素直な感想を狐に述べたのだ。

彼は硬直する銀狐の胸に顔を埋めた。まるで長年連れ添った恋人に甘えるように。

狐は完全に男を振り払う機会を逃してしまった。

彼女は男よりは数倍長く生きていた。しかし妖怪としてはまだまだ未熟なためか、彼女は目の前の人間に対して情が移ってしまった。最早、狐から彼を食したいという感情は消え失せていた。緊張と不安が混ざった不安定な気持ちで彼女を襲う。

そして更に事は進んだ。

男が狐の腹部を触り始めた。

「ひえっ！？ こ、こらお前！」

人間でいう乳房の部分に男は手を当てる。まるで高級品を扱う様に優しく狐を撫でる。顔は相変わらず体毛の中に埋めたまま、目を閉じたまま胸一杯に深呼吸を繰り返す。男は狐の体を堪能しながら弄くり回していく。

「あっお前、腹部は弱い……」

「普段誰にも触れられることのない腹を、普段見下している人間の異性に触れられている。現状を信じたくない銀狐は思わず首を横に振るが、男は止める素振りを見せない。彼女は、この異性を喜ばせる丁寧な愛撫に感情を流されていく。」

「血迷ったか、うっ。私は狐だぞ。妖怪だぞ」

「きちがいと呼ぶなら呼べばいい。不快なら、突き飛ばすなり殺すなりすれば良い。分からない、とにかくお前に魅かれてしまった」

暗闇の中、男はひたすら妖狐への愛情表現を続ける。耳、尻尾、首筋、目の前の感触をじっくりと確かめ、体臭を楽しんでいく。絶え間ない刺激に、狐の方も抵抗する気力を削がれていく。

男は、今まで殆ど異性を好いたことがなかった。幼い頃好きになるような年代の女の子が身近にいたことがなかったのだ。もちろん恋をしなかった訳ではない。ただ恋と思われる感情は、歳の差や身分で結局始まりもしないものばかりだった。しかもそれらは、昼夜恋心を溺れさせる程に濃厚なものでもなかった。

だから男は、獣である彼女を見た時にこれだと確信した。確かに相手は狐で妖怪だが、男には今まで見てきた異性の中で一番美しいと信じていた。

狂ったように目の前の人外を追い詰めていく。

そして男は、その大きな狐の口に再び唇を重ねた。

狐は無意識に舌を突き出して男の口内に侵入させた。彼は、最初は驚いたものの、惚れた相手からの好意を無駄にしまいと舌同士を絡めていく。獣の独特な臭いに不快を感じることはなかった。

彼は銀狐の頬に手を当てて更に口づけは濃さを増す。

彼が顔を離すと、銀狐の目は虚ろになっており、呼吸も非常に荒くなっていた。

彼女からは、もう現状を回避する気力は残されていなかった。

「いいか？」

男の問いに、一匹の妖怪は黙って頷いた。